

# 全国学童保育指導員学校 西日本会場（岐阜）

## 20220605 レポート

（ あおぞらクラブ 笥 由衣 ）

午前中の全体会、印象に残ったことが2つありました。1つは、コロナ禍の生活が3年も続き、文化の継承や発展、創造が難しくなっているというお話です。コロナによって学童を利用することについて自粛をお願いしていた時期があり、思い返してみればそれによって、とくに高学年の子どもたちの日額への変更や退所につながったケースがいくつかありました。また、低学年の子どもたちにおいても、自粛によって登所日数がへってしまったことで、生活の連続性のようなものや、日々の習慣づけのようなものを分かってもらったり、伝えていくことの難しさを感じています。学童保育の性質として低学年が多く、そして中心的な生活になってしまう中で、そのような部分に時間がかかることは、高（中）学年にとってはやはりストレスを抱えることになったり、ギャップを感じている部分だろうと考えさせられました。

2つ目は『子どもの心に寄り添う＝生活、感情、願いを一緒にいて、見て、聴いて、感じて、考えて、まるごと受け止めようとする姿勢』というお話についてです。

私の、“こんなクラブになったらいいな（したいな）”の中の1つに、“願いを言葉で伝えることができる”ようになってくれたらいいなという思いがあります。『こんなことがした』『この遊びがしたい』『この場所で、〇〇遊びしてもいい？』という発言があったり、好きなものを好きだと言える（苦手なものを苦手だと言える？）、そんな発言がたくさんあるクラブがいいなと思っています。そのためには、子どもたちがいろんなことを言える環境を作ってあげることが大事だと思うし、私自身がそんな考えを持っているんだよ、ということ子どもたちに知ってもらいたいかなと考えます。

また、願い（気持ち）は上記のように前向きなときばかりではなく、ケンカをしてしまったときだって、泣いている子にだって、どんなときでも誰にでもあると思うので、一生懸命子どもたちに寄り添っていきたいと思います。

午後からの分科会は、講座6の高学年をふくむ学童保育の生活を受講しました。実践講座のため、報告者の実践記録をもとに助言者の先生のお話を聞いたり、グループワークに参加しました。

当時6年生だった女の子と1つの出来事をきっかけに半年にわたり、関係修復をすることができなかったことがある…と報告者の山本さん。高学年と指導員がもめてしまう、上手に関係を築くことの難しさや高学年の難しさと、山本さんの葛藤が盛り込まれた実践記録でした。

分科会の中で、子どもをとらえる基本として、子どもがいる空間があり、周りに人がいるだけでは「生活」があるとは言えない、子どもたちひとりひとりの「いのち」の表現や活動があるからこそ、生活が存在する、指導員は子どもの意識と感情にいつも触れている、と助言者の先生のお言葉です。少し午前中の全体会と似ているような内容の講義で、子どもたちが学童で喜怒哀楽を一生懸命に出しているからこそ、子どもたちの「生活」が成り立っていて、その言動の裏側にある子どもたちの心や本当の思い（願い）に気づいていけるように、明日からも頑張ろうと思える分科会でした。